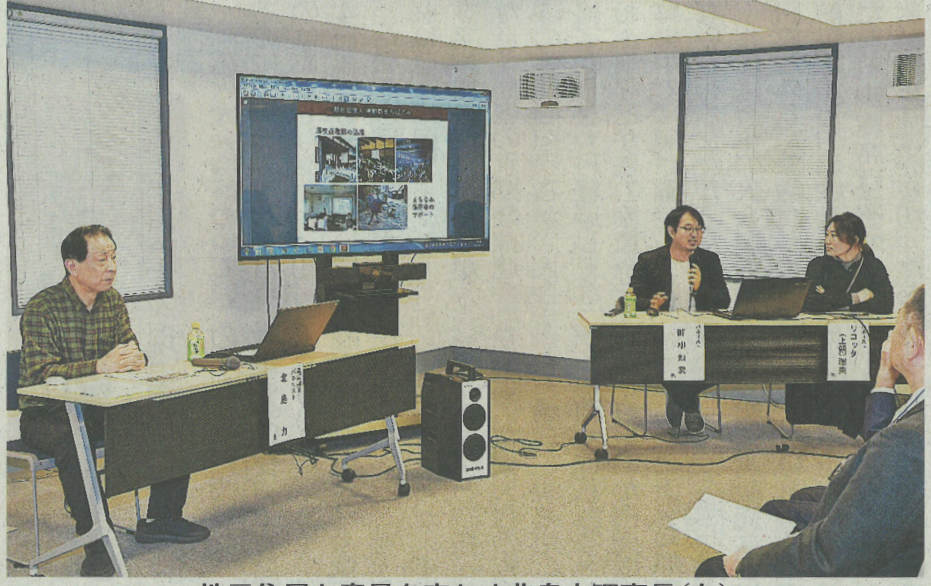
津和野 重伝建選定10年シンポ

歴史的町並み 背景再確認



地元住民と意見を交わす北島力理事長（左）
＝島根県津和野町後田、町役場津和野庁舎

2013年に重要伝統的建造物群保存地区に選定され10年を迎えた島根県津和野町で23日、シンポジウムがあった。講演とパネル討論を通じて、歴史的な町並みが保存されてきた背景を再確認し、今後のまちづくりのヒントを探った。

町伝統的建造物群保存地区保存審議会会長で、大阪電気通信大の矢ケ崎善太郎教授(65)＝日本建築史＝が基調講演。江戸末期の「嘉永の大火」（1853年）で城下町の多くが焼けた際、新たなまちをつくるのではなく、以前の建物を復興したのが大きかったと振り返り「人々と自然との共生が津和野の景観を生み出した」などと町の歴史を紹介した。

パネル討論では、同じく重伝建に指定され、歴史的資源を生かしたまちづくりに取り組む福岡県八女市のNPO法人・まちづくりネット八女の北島力理事長(71)らが登壇した。

北島理事長は、伝統的建築物を保存修理する技術者集団の育成・継承のほか、地区内の空き家を保存するための官民協働再生事業の仕組みを説明し「買い物や食事をする場所、宿泊施設を統一したコンセプトで見せる仕掛けが必要だ」と助言した。

訪れた津和野高校3年の栗栖健吾さん(18)は「多くの人が津和野の町並みを守ろうと力を注ぐ姿が感じ取れた」と話した。

シンポジウムは津和野町と町教育委員会が主催し、約40人が参加した。

（藤本ちあき）